公表用論文要約

里内克巳

旧来のアメリカ文学史において、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時代は、リアリズムと自然主義という二つの潮流に特徴づけられてきた。しかし、社会が急激な変化を示したこの時期は、アフリカ系、先住民出身の書き手や、東欧やアジアからの移民出身の作家など、かつてないほど多様なバックグラウンドを持った人々が、リアリズムの枠から大きくはみ出すような独自性をもつ作品を世に問うた時代でもあった。書き手の多様性を視野に入れたとき、この時期の文学は、20 世紀後半の多文化主義の文学の先駆として位置づけられるのではないか。そうした問題意識から本論考『多文化アメリカの萌芽』の構想は出発している。

本論考は 12 の作品論を積み重ねることを通して、世紀転換期アメリカの多文化的様相を立体的に検討する試みである。周縁的な位置に置かれていたため、論じられる機会が少なかった作家を中心に、世紀転換期という同じ時代に活躍した書き手 11 人を取り上げ、それぞれの書き手の、時代の状況と深く切り結んだ生や思考が端的に表れていると思われる作品を精選した。そして各テクストを、人種・エスニシティという観点からのみならず、ジェンダーや階級性といった観点とも絡めつつ分析することによって、作品に盛り込まれた複合的メッセージを解読した。

第Ⅰ部「他者を捉える」では、主流・非主流の書き手による〈他者〉の表象をめぐる問題について、人種・エスニシティと階級・貧困といった側面が交差する地点へと測鉛を下ろした。第 1 章「写真と言葉で描かれた都市」では、世紀転換期にジャーナリストとして活躍したジェイコブ・リースのフォト・ルポルタージュ『向こう側にいる人々の暮らし』(1890 年)を取り上げた。この著作は、ニューヨークのスラムに住む貧民たちを取材し、その生活を文章と写真で紹介した著作であるが、写真が著作の中に有機的に組み込まれていることに着目し、多様な意味を持つテクストとしての写真を本文と併せて解読しようとする点に本章の特色がある。章の前半では、リースの著作における視覚テクスト（写真）と文字テクスト（本文、注釈、キャプション）との関係性や、取材者と取材対象との間の力関係を測定した。それを踏まえて後半では、世紀転換期において階級的・エスニック的な〈他者〉像が言葉や写真によって、いかに構築されていたかという点から、この時代の各エスニック集団（イタリア系、ユダヤ系、中国系、アフリカ系）の捉えられ方を概観し、続く諸章への導入とした。

このリース論を糸口にして後続する二つの章では、都市の貧困に取材した作家スティーヴン・クレインと、農村の貧困問題に取り組んだアフリカ系知識人W・E・B・デュボイスを取り上げ、これらの書き手たちが階級的な、あるいは人種的な意味合いでの〈他者〉を描くことの限界に縛られつつ、いかにそれを乗り越えようとしたかを明らかにした。第 2 章

「豊かさの向こう側」では、ニューヨークの下層階級の生活を扱うクレインの小説『街の女マギー』(1893 年)を素材とし、浅薄な中産階級的価値観に影響された作中人物たちが、社会的な批判精神を骨抜きにされて特定の空間に封じ込められている有様を、第 1 章で扱ったジェイコブ・リースの著作を参照しつつ分析した。それによって浮かび上がるのは、下層階級を主な読み手としながらも中産階級的な価値観が紛れ込んでいるダイムノヴェルというジャンルを、クレインが意識的に取り込んだ可能性である。同時に、現実を忠実に再現するという旧来のリアリズム概念よりむしろ、メディアが受け手にとっての仮の〈現実〉を作り上げる、という正反対の方向から『マギー』を捉えなければならないことも見えてくる。この章では、貧しい人々を異質な他者として描く同時期の潮流に歩調を合わせながらも、同時にそのような傾向に対する懐疑的な視線を向けもする『マギー』の複合的な側面を明らかにしつつ、この作品の現代性を探った。

第 3 章「〈車窓の社会学者〉に抗して」では、アフリカ系思想家デュボイスの『黒人のたましい』(1903 年)を素材とした。この著作の中盤でデュボイスは、深南部の黒人農夫たちの生活ぶりをルポルタージュ的な筆致で描いているが、貧困にあえぐ農村の黒人たちが描かれる一方で、都市部における移民たちの苦境も多分に意識されている。その点に着目すると、この中盤はデュボイス自身の社会学的著作『フィラデルフィアの黒人』(1899 年)や、ニューヨークの貧困に取材したジェイコブ・リースのフォト・ルポルタージュなどの延長線上に位置していることが分かる。だが同時にデュボイスは、それらの先行著作が持っていた〈他者〉を覗き見る姿勢を乗り越えようともしている。そうしたことを論じたうえで、政治へのコミットメントを深めていく途上にあった知識人デュボイスの問題意識を反映するテクストとして『黒人のたましい』を捉えうると結論づけた。

第 I 部と対を成す形で自己と他者の問題を取り上げる**第 II 部「自己を表す」**では、社会の周縁に置かれた書き手による自伝テクストの様相に焦点を当てた。まず第 4 章「死の影の谷を抜けて」では、第 I 部の最後で論じたデュボイスの著作を再び俎上に載せた。『黒人のたましい』の最後の数章は、評論、自伝、伝記、短編小説と、章ごとにジャンルが移り変わり、難解で知られるこの著作の中でも最も見通しのきかない部分となっている。そこでこの第 4 章では、互いに異質と見える章と章との間の繋がりを、使われている語彙やレトリック――とりわけ「死の影の谷」という聖書に由来する表現――に焦点を当てることで見出そうとした。その作業を通して、アフリカ系の人々にとっての救世主が到来することへの期待や、その困難さに由来する苦渋を伝えようとする書き手の意図を明らかにした。同時に、大学人という枠を脱して黒人指導者としての一歩を踏み出そうとする書き手デュボイスの自伝としての側面も見出し、〈公〉と〈私〉が交錯するこの著作のダイナミズムを探った。

第 5 章「赤い鳥のビーズ細工」では、先住民系女性作家ジトカラ＝シャの作品集『アメリカ・インディアンの物語』(1921 年)を取り上げ、再評価を試みた。自伝、短編小説、政治的マニフェストとジャンルが移ろい、一読すると散漫な印象を与えるこの作品集であるが、章と章を繋ぐ要素に注目することで、全体としての統一性が見えてくる。書き手自身の幼年期

から生徒、教師、活動家に至る軌跡を不連続ではあっても語るという側面と、北米先住民の歴史を過去から現代までやはり不連続に辿るという側面が、この作品集には共存している。様々な種類のテクストを並べ、〈公〉と〈私〉という二つのレベルの歴史を大胆に結合させる点で、この作品集はデュボイスの『黒人のたましい』とも響き合う部分を持つ。そのようなことを明らかにしたうえで、従来は単独で扱われがちであったアフリカ系アメリカ文学と先住民系文学との交差の様相を更に探っていくことを提案した。

引き続いて第6章「奇跡の人の文学」では、上述したエスニック系の作家の自伝的テクストと連結させる形でヘレン・ケラーの自伝を分析した。ケラーの『私の人生の物語』(1903年)は、出版から百年以上が経った今も広く読まれている自伝だが、文学批評の対象にほとんどされてこなかった。本章ではこの〈沈黙する名作〉を取り上げ、その意義を考察した。19 世紀にアメリカで隆盛を極めた奴隷物語というジャンルと境を接する作品であることを指摘し、大学の保守的な在りようや対外的な戦争に着手した自国アメリカに向ける、ケラーの批判的眼差しを検討した。文学作品によって自己形成を果たし、大学や社会や国家といった自分を取り巻く外の世界に目を開き耳を澄ませる、批判精神と巧みな表現力を備えた作家としてのケラー像を浮かび上がらせ、この自伝を文学史のなかに正当に位置づけることを目指した。

第 III 部「物語る」以降の本論後半部は、小説ジャンルに重点を置き、物語という器に書き手の社会的メッセージがどのように盛り込まれているかを作品に即して分析した。ここでは、先住民系、ユダヤ系、中国系の書き手三人の作品を取り上げた。まず第7章「歴史のトラウマを書く」では、『ワイネマ、森の子供』(1891 年)を取り上げた。この作品は、アメリカ先住民の血をひく女性作家アリス・キャラハンが書いた小説だが、物語展開に難があり先住民の立場に立って書かれていない、という批判がなされている。この章では、19 世紀アメリカの異人種間ロマンスの定式を視野に入れ、同化主義的なイデオロギーから外れる先進的な視点が作品にあることを指摘した。また、〈剰余〉であると否定的に見られがちな物語の結末部にも本章では目を向けた。この結末部では、アメリカ合衆国と先住民との抗争に終止符を打った 1890 年の「ウーンデッド・ニーの悲劇」が物語化されているが、この出来事こそ、作者を作品創作に駆り立てた主因であって、先住民の側に読者の共感を奪回しつつ、合衆国の行ないを告発しようする作者の巧みな工夫が小説全体に読み取れる、という主張を行なった。

第8章「融けきらない移民たち」は、ユダヤ系アメリカ文学の父祖エイブラハム・カーハンの第1長編『イェクル』(1896 年)に盛られたメッセージを、性とエスニシティという複合的な観点から解読する試みである。ロシアからの移民である主人公ジェイクは、男性性を過度に誇示し、訛りだらけの英語をまくしたてることで〈アメリカ人〉になろうと奮闘するが、こうした同化の試みは、旧世界の旧弊な価値観を逆に強化することになり失敗に終わる。他方でこの小説は、イディッシュ語しか話さず、ロシアとアメリカが共通して持っているジェンダー規範に背を向けるユダヤ人労働者バーンシュタインが、ジェイクの妻ギトルの新た

なパートナーになるという展開も組み込んでいる。二重のプロットの分析を通して、ユダヤ移民の男女が自らを見失うことなくアメリカ人になるための条件をめぐる作者の考えを明らかにした。

第 9 章「トランスパシフィックの物語学」では、アジア系アメリカ文学の源流に位置する女性作家スイシンファー（本名イーディス・イートン）の代表的な短編小説三篇を解読した。世紀転換期に人気を博したジャポニズム文学は、アジア人女性とアメリカ人（白人）男性との恋愛を描いても、アメリカ人女性とアジア人男性との恋愛は回避する傾向があった。英国人の父と中国人の母との間に生まれたユーラシアン（欧亜混血）であるスイシンファーは、そのような非対称性を持ったロマンスの定式に異を唱えるような小説を書くことで、人種・民族や性や階級をめぐって主流のアメリカ人読者が抱いている偏見を是正しようと試みた。第 III 部で取り上げたキャラハン、カーハン、そしてスイシンファーは、それぞれ民族的背景こそ異なるものの、男女の関係を軸にしたロマンスという物語展開を通して社会的なメッセージを発信しようとした点に共通性が見られると結論づけた。

第 IV 部「過去を振り返る」では、第 III 部に引き続いて小説作品の政治ロマンス的な側面に光を当てたが、この最終部では特に、黒人奴隷制の負の遺産という問題に書き手がどのような眼差しを向けているかを検討した。アフリカ系アメリカ人たちの多くは、南北戦争の終結と共に奴隷の身分から解放されたが、その後の政治的混乱の結果、解放とは名ばかりの低い社会的地位に甘んじざるを得なかった。第 IV 部ではまず、このような同時代の状況に対して、アフリカ系作家たちがどのような形で反応し批判を行なったのかを、フランシス・Ｅ・W・ハーパーとチャールズ・W・チェスナットの作品を素材にして検討した。

第 10 章「〈人種〉のメロドラマ」では、アフリカ系女性作家ハーパーの唯一の長編小説『アイオラ・リロイ』(1892 年)を取り上げ、人種と性という二つの観点からの政治的主張が、どのような形で作品に盛り込まれているかを検討した。この小説は、恋愛ロマンスのプロットを前面に押し出し、ヒロインがどのような男性を拒絶しまた選び取るのか、という興味で読み手を牽引する。それは同時に、作者自身の政治的見解を読者に共有させるための仕掛けでもある。作品内で使われている〈影〉や〈病〉をめぐるレトリックにも関心を払いつつ、本論では、南北戦争という過去を物語の背景としながらも、小説執筆時点におけるアフリカ系アメリカ人の社会的向上の必要性や、その際に女性が果たすべき役割といった問題について、作者ハーパーが伝えようとした見解を、小説作品の分析を通して明らかにした。

第 11 章「〈人種〉から〈人類〉へ」では、アフリカ系作家チャールズ・チェスナットの『杉に隠れた家』(1900 年)を取り上げた。この小説は二部構成になっており、混血のヒロインが白人として幸福を掴もうとして失敗する前半と、彼女が黒人として生きようとして挫折し、死に至る後半に分かれている。その中間に置かれた第 18 章は一種の幕間としての役割を果たしており、作品批評での盲点となってきた。等閑視されてきたこの章を、本論では小説の脇役たちに光を当てる人物スケッチ集成と捉え、そこから作品全体における作者の狙いをあらためて再考した。その作業から、世紀転換期のアメリカでは禁忌となっていた白人女性

と下層階級の黒人男性との恋愛を、人種偏見に染まった当時の読者に受容させるための巧みな工夫を明らかにし、人種という区分を超えて人類が共存するための寛容を訴える、作者の隠れたメッセージを解読した。

最後の第 12 章「アメリカの始まりに目を凝らして」は、第 I 部で扱った社会の主流派による〈他者〉の表象という問題に再び立ち返る章である。この章では、国民作家マーク・トウェインの短編「インディアンタウン」(1899 年)とそれを基にして書かれた長編小説『それはどっちだったか』(1899-1906 年)を取り上げた。失敗作という評価を受け、これまで本格的な分析の対象とされてこなかったこの長短二編の未発表作を重ね合わせて分析することで、奴隷制と人種問題をプロットに組み込んだこの物語の重要性を明らかにした。南部の田舎町インディアンタウンを舞台にするこの二作は、いわゆる〈ミシシッピもの〉に代表されるトウェインの南部探求の試みの終着点かつ総決算として位置づけられる。そのような主張に加えて、殺人を犯しながらもそれを隠して嘘をつき堕落していく主人公の姿は、作者トウェインの誇張された自画像であると同時に、黒人（アフリカ系）のみならず先住民を含めた〈他者〉を抑圧してきた歴史を持つアメリカ合衆国の肖像でもあることを論じた。章の結語では、この主流作家の作品を、これまで論じてきたマイノリティ作家らのそれと突き合わせることで本論考全体を総括し、アメリカ世紀転換期の文学の現代性と更なる見直しを展望して全体のまとめとした。